The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポストコロニアル・フォーメーションズ(13)　はじめに
Author(s)	木村, 茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69886
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

１．『ポストコロニアル・フォーメーションズ XIII』の刊行に際して

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科主催の「言語文化共同研究プロジェクト」の一環として、この 10 年あまり進めてきた共同研究「ポストコロニアル・フォーメーションズ（PCF）」の 2017 年度の報告書である。この共同研究のシリーズとしては 13 巻目になる。PCF は言語文化研究科と文学研究科の教員、院生、博士申請資格者などを「正規」メンバーとする研究会により進められてきたが、この研究会はさらに、1996 年に活動を開始したカルチュラル・スタディーズの研究会「カルチュラル・スタディーズ・サークル（CSC）」を前身としている。それも含めるなら、すでに 20 年を超える歴史をもつことになる。その間、これらの研究会のメンバーが中心になり、『ポストコロニアル文学の現在』（晃洋書房、2004 年）や『英語文学の越境――ポストコロニアル/カルチュラル・スタディーズの視点から』（英宝者、2010 年）などの書物も出版してきた。

以上のような背景から、PCF 研究会には、言語文化研究科を修了して大学の教職についているものなど、「非正規」メンバーも引き続き参加している。東京、名古屋、金沢、岐阜などから集まってくるこれらのメンバーを抜きにして、この研究会は成立し得ない。毎年のことながら、この報告書は最初にこれらの仲間たちに送り届けたいと思う。

２．2017 年度の PCF の活動

PCF の研究会は、原則として毎月の最終土曜日に開いている。多くはポストコロニアル研究関係の研究書や論文を取り上げ、それぞれの担当者がその内容を紹介・検討した後、全体討論に入る。このようにして、先行研究の趣旨や意義、欠点や盲点などを議論していく。それはまた、私たち自身の批評意識や批評の言葉を鍛えていくプロセスでもある。

2017 年度の PCF 研究会では、2010 年以降に出版された 2 冊の論集を取り上げた。1 冊目は、Janet Wilson、Cristina Sandru、Sarah Lawson Welsh の編集による *Rerouting the Postcolonial: New Directions for the New Millennium* (Routledge, 2010)、2 冊目は、Rosi Braidotti と Paul Gilroy が編集した *Conflicting Humanities* (Bloomsbury, 2016)である。最初の論集は、2017 年 4 月の研究会から 12 月の研究会にかけて検討し、2018 年に入ってからは、2 冊目の論集に取り組んでいる。

以下、その研究会の記録を残しておきたい。開催日、章とタイトル、担当者の順に示す。研究科の修了生で大学の専任の職についているものには、現職の大学名も付記しておく。

1. 2017 年 4 月 29 日（Janet Wilson, Cristina Sandru and Sarah Lawson Welsh eds., *Rerouting the Postcolonial: New Directions for the New Millennium*, Routledge, 2010）

・“General Introduction” & Chapter1 “Introduction” 木村茂雄

・Chapter2 “Between roots and routes: cosmopolitanism and the claims of locality” 村上八重子

・Chapter3 “Cosmopolitan criticism” 花井晶子

2.　2017 年 5 月 27 日（*Rerouting the Postcolonial: New Directions for the New Millennium*）

・Chapter4 “‘The new bilingualism’: cosmopolitanism in the era of Esperanto” 小杉世

・Chapter5 “Globalization’s Robinsonade: *Cast Away* and neo-liberal subject formation” 舞さつき

・Chapter6 “Transnation” 歳岡冴香（近畿大学）

3.　2017 年 7 月 1 日（*Rerouting the Postcolonial: New Directions for the New Millennium*）

・Chapter7 “‘Outlines of a better world’: rerouting postcolonialism” 稲垣健志（金沢美術工芸大学）

・Chapter8 “Introduction” 各自

・Chapter9 “Cracking imaginaries: studying the global from Canadian space” 安保夏絵

・Chapter10 “‘Here is where I am’: rerooting diasporic experience in Leila Aboulela’s recent novels” 加瀬佳代子（金城学院大学）

4.　2017 年 9 月 24 日（*Rerouting the Postcolonial: New Directions for the New Millennium*）

・Chapter11 “Rerouting diaspora theory with Canadian refugee fiction” 小杉世

・Chapter12 “Ma Jian’s *Red Dust*: global China and the travelling-self” 松本ユキ（近畿大学）

・Chapter13 “Cosmopolitan provincialism in a comparative perspective” 村上八重子

5.　2017 年 10 月 28 日（*Rerouting the Postcolonial: New Directions for the New Millennium*）

・Chapter14 “Introduction” 各自

・Chapter15 “A postcolonial aesthetic: repeating upon the present” 木村茂雄

・Chapter16 “Rerouting commitment in the post-apartheid canon: TRC narratives and the problem of truth” 花井晶子

・Chapter17 “From exceptionalism to social ecology in Southern Africa: isolation, intimacy and environment in Nadine Gordimer’s *Get a Life* (2005)” 松本承子

6.　2017 年 12 月 9 日（*Rerouting the Postcolonial: New Directions for the New Millennium*）

・Chapter18 “Un-American exceptionalism in the disciplinary field: from unmeltable ethnics to flexible citizens” 松本ユキ（近畿大学）

・Chapter19 “Rerouting the postcolonial canon through linguistic remapping: why remap?” 歳岡冴香（近畿大学）

・Chapter20 “At the intersection of queer and postcolonial discourses: rerouting the queer with Jean Sénac and Jean Genet” 小杉世

7.　2018 年 1 月 28 日（Rosi Braidotti, Paul Gilroy eds., *Conflicting Humanities*, Bloomsbury, 2016）

・“Introduction” 桑原拓也

・Chapter1 “The Contested Posthumanities” 桑原拓也・舞さつき
・Chapter2 “A Borderless World?” 杉浦清文（中京大学）
8.　2018 年 3 月 4 日（*Conflicting Humanities*）
・Chapter3 “Borderless Worlds?” 安保夏絵
・Chapter5 “Not Yet Humanism or the Non-Jewish Jew Becomes the Non-Humanistic Humanist” 稲垣健志（金沢美術工芸大学）

３．ポストコロニアルとは何か？ 人文学とは何か？

2017 年度に取り上げた 1 冊目の論集 *Rerouting the Postcolonial: New Directions for the New Millennium* は、2007 年にイギリスのノーサンプトン大学で開催された同じタイトルの国際学会に基づいている。そのタイトルが示すとおり、21 世紀におけるポストコロニアル性の新しい方向づけを、さまざまな面から探った論文集である。

“Rerouting”のもとにはもちろん“route”という言葉があるが、この本のいくつかの論文では、それがしばしば“root”と対比されている。英語では同じ音だが、片仮名で「ルート」と「ルーツ」の対比と言い換えてもいいだろう。“General Introduction”でも触れられているとおり、このような対比の主唱者は、文化人類学者のジェイムズ・クリフォードである（James Clifford, *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Harvard UP, 1997）。研究会で検討した論集では、どちらかといえば、クリフォードの主張に倣い、ポストコロニアル性の土着性（ルーツ）よりも、その移動性（ルート）に着目した議論が目立っている。その何人かの論者が、ポストコロニア性の「コスモポリタニズム」や「リゾーム性」に関心を示しているのも、この点と関連している。

コスモポリタニズムについていうなら、この概念の再評価は 1990 年代ごろから盛んに行われていて、ジェイムズ・クリフォードは、そのもっとも早い時期の論者でもある。クリフォードの議論も含め、近年のコスモポリタニズム論の可能性と問題点については別なところ論じたことがあるので、詳述は避けるが、その一番の落とし穴は、端的にいって、この言葉に伝統的にまとわりついている西洋中心的な個人主義やエリーティズムに、それが横滑りしていく危険性だろう（木村茂雄「ポストコロニアル理論とコスモポリタニズム」木村茂雄・山田雄三編『英語文学の越境』）。

20 世紀後半以降の現代世界において、さまざまな人びとの移動が非常に重要なことはたしかである。ポストコロニアル文化やポストコロニアル研究の多くの部分が、これらの移動する人びとによって形づくられてきたとさえいえなくはない。しかし、現在の欧米やアジアの一部における移民や難民の問題などを思い起こすなら、ポストコロニアル研究が、これらの移動する知識人や文化人だけを取り上げて済ますわけにはいかないことも明らかだろう。

ただし、このような問題意識がこの論集に欠如しているというわけではない。たとえば、古手のポストコロニアル批評家のサイモン・ギカンディは、彼の議論をこう結んでいる。「他

者に代わって語っていると主張するポストコロニアル・エリートは、旧植民地出身の大多数のものが難民や非合法の外国人として世界システムに参入するときの状況、あるいは、そのような参入のプロセスや現実との関わり合いの条件が、グローバルな文化の流動について、いかに異なる物語を紡ぎだしているのかを見ようとはしない」（*Rerouting the Postcolonial* 34）。

以上のような点は私が興味をもち、研究会でも議論した論点だが、それはこの論集が提起している多様な論点のうちの一つにすぎない。ここで詳述する余裕はないが、たとえば、私たちがこの数年、ガヤトリ・スピヴァクやアルジュン・アパデュライなどをとおして検討してきた、ポストコロニアル性とグローバル性との関係という問題も多くの議論で意識されている。また、具体的な研究対象が、ソ連崩壊後の東欧や現代の中国の文化などへと広げられていることも注目される。

2 冊目の *Conflicting Humanities* も、エドワード・サイードの没後 10 年にあたる 2013 年にユトレヒトで開かれた国際学会に基づいている。基本的にはサイードを記念する学会なので、サイードの再評価・再検討の試みも当然なされているが、その書名（『競合する人文学』）が示すように、「人文学」の現在の状況と今後の可能性という、より野心的な問題意識を含んだ論集である。

ただし、英語の“humanity”という言葉は、レイモンド・ウィリアムズによれば、“human”や“humanism”などの一群の語との関連でさまざまに意味を変化させてきた言葉でもある（Raymond Williams, *Keywords*, Fontana Paperbacks, 1976）。ポストコロニアル的な観点からは、“humanity”や“humanism”に含まれている「人間」とは、どこの誰のことなのかという問いを立てることも可能だろう。また、最近では“posthuman”という語もしばしば見聞きするようになった。もっと現実的な話としては、「人文学不要論」の風当たりが、欧米では（日本よりも）早い時期から強くなっていた状況もうかがえる。

Conflicting Humanities の検討は始まってから間もないので、以上は「予告編」的な紹介にすぎない。この報告書にも反映されているとおり、PCF 研究会のメンバーの具体的な関心や研究対象は多種多様だが、それぞれに「人文学」に取り組むものとして、その現状の問題点や今後の可能性について思い巡らすことも有意義なことにちがいない。2018 年度の研究会の前半は、それをしばらく続けることになる。

木 村　茂 雄